

## 2005 年福建調査報告

船田 善之

### はじめに

筆者は、2005年2月21日から28日まで、中国福建省南部・西部を調査地域として、史跡・石刻の現地調査を行った。日本からの全行程に深澤貴行氏（日本学術振興会特別研究員・早稲田大学大学院）が、福建省におけるほとんどの行程に上内健司・山口智哉両氏（大阪市立大学大学院、当時浙江大学に留学中）が、それぞれ同行した。

いうまでもなく、13～14世紀のいわゆるモンゴル時代、福建南部に位置する泉州は、港灣都市としてかつてない繁栄を迎えた。泉州及びその周辺は、当時の多民族・多言語状況を色濃く遺している地域である。筆者自身、当該時代の多民族社会・多言語社会の様相の解明を研究テーマの一つとしており、泉州及びその周辺地域の多言語からなる石刻史料にはかねてより関心を寄せていた。そこで、多言語石刻をまずモノとして実見し、その現状を確認して今後の調査研究に備えることを目的として、今回の調査を計画した。

本調査の主たる目的は、泉州市海外交通史博物館（以下、海交館と略称）展示物の調査、及び清浄寺・開元寺など寺廟の調査である。折良く〔福宗泉〕が刊行されたため、〔福宗興〕と併せて、泉州・莆田両域の漢文碑刻の全体的把握が容易となっており、これら地域の石刻調査も調査の中心に位置づけた。両書に基づいて、独自に両地域の元代石刻リストを作成し、行程計画の参考とした<sup>(1)</sup>。この過程で、廈門市博物館に至正21年（1361）「葉氏買地券」〔福宗泉 963〕<sup>(2)</sup>（陶製、もと同安県）が所蔵されることを知り、同館訪問を行程に組み込むこととした。その上で、文物関係書籍、考古関係報告書、ウェブなどで史跡などの情報を収集した結果、廈門－泉州－莆田－永定－漳州－廈門という基本行程を定めた。

### 行程日誌

2月21日（月） 成田－廈門 曇

7:45頃、空港ロビーで、深澤貴行氏と待ち合わせ。10:00成田発のNH935便は、ほぼ定刻通り、現地時間13:30頃、廈門高崎国際空港に到着。天候は曇で思いのほか肌寒い。タクシーに乗り、予約していた牡丹万鵬賓館へ向かう。

チェックインの後、タクシーで故里山炮台・栄光宝蔵博物院へ。15:20着。晴れていれば金門島を臨むこともできるだけに、このあいにくの天候を恨めしく思う。博物院には、宋元～近代の鉄炮などの文物も展示されている。その後、バスで廈門大学まで戻り、16:45頃から、そばの南普陀寺を参観。夕食はガイドブックにも載っている有名店にて、海蠣煎や扇貝・蝦などに舌鼓を打つ。

<sup>(1)</sup> 〔森田憲司 2005〕も泉州府分冊のうち、現存元代石刻をリスト化している。

<sup>(2)</sup> 〔福宗泉〕・〔福宗興〕に付した数字は、頁数ではなく両書がそれぞれの石刻に付した番号である。

2月22日(火) 廈門—南安—晉江—泉州 曇

朝食後、9:00 過ぎにチェックアウト。本日の予定は、南安・晉江の史蹟を巡ってそのまま泉州へ向かうというもの。ポーターを通じてタクシーと交渉。唯一その辺りの史蹟に詳しいという運転手のタクシーを選択。

9:30 に出発し、10:55 頃、南安市・晉江市の境界、石井江に架かる、宋代創建の安平橋(五里橋)へ。運転手の勘違いでまず振万園を散策する羽目になるが、無事安平橋へ。晉江市側には、小さな廟がある。水心亭と呼ばれており、明以降の碑が並ぶ。その後、そばの水心禅寺を参観。体調不良を覚えるが、この段階では、朝のバイキングの食べ過ぎと車酔いだと解釈し、調査を続行する。

続いて、タクシーの運転手の勧めにより、12:00 頃、小高い山頂に建つ靈源寺へ。残念ながら、文物的にはみるべきものはなかった。若干後戻りして、12:45 頃、龍山寺へ。小さな寺だったが、明碑が確認できた。続いて、13:30、草庵石刻へ。ここにきておなかを下してしまう。(後)至元5年(1345)「草庵造像題刻」[福宗泉59]を確認。お堂の中、摩尼光仏石像の両側に刻される。

時間がおしてきたことと、体調に配慮し、晉江旧城区の調査はあきらめ、泉州市を目指す。14:20 頃予約しておいた航空酒店に到着。おなかには下しているが、それ以外については体調も回復。ここで、杭州から福州経由で到来した上内健司・山口智哉両氏と携帯で連絡を取り、関岳廟で合流することに。徒歩で関岳廟へ向かい、15:30 頃、無事合流。15:45 頃、清



写真1 清浄寺

浄寺へ(写真1)<sup>(3)</sup>。モスクの石壁に施されたコーランの文句[泉伊石2-7, pls. 6-17][泉宗石20-21, pls. 60-62]や、明重刻の至正10年(1350)「重立清浄寺碑」[福宗泉61][泉伊石8-10, pl. 21][泉宗石22-24][杉山1989: 254]、永樂5年(1407)「米里哈只勅諭碑」[福宗泉71][泉伊石7-8, pl. 18][泉宗石21, pl. 63]を実見。そのほかにも未整理のアラビク石刻が並べてあった。

16:20 頃、府文廟へ。翌日は元宵節のため、灯籠で飾られている。伝統的なものか

<sup>(3)</sup> 泉州清浄寺をめぐる最新の研究として[向2002]がある。

ら現代的なものまで多種多様である。その後、夕食にはまだ早いということで、新華書店へ。ここで地図を購入するが、その直後、筆者の容態は急変。激しい吐き気に襲われ、嘔吐。タクシーでホテルへ戻ろうとするが、泉州は古い街並みをなお残しているためか、タクシーが少ない。なかなかつかまらないので、輪タクをつかまえると、15元とふっかけてくる。相手にせず、何とかタクシーをつかまえる。とにかく気合いと睡眠で回復させなければ、とベッドで休むが、定期的に目が覚め、トイレへ、の繰り返し。どうやら、食中りだったようだ。一番怪しいのは、昨夜の海蠣煎の牡蠣であろうか。場合によっては、今後の予定を変更することも考えなければならない。

2月23日(水) 泉州—南安—泉州 曇時々雨

朝、目が覚めると、体調はずいぶん回復したようだ。朝食も控え目ながら食べることができた。9:15、タクシーで開元寺へ。ここで別のホテルに宿泊していた上内・山口両氏と合流する。目を惹いたのは、有名なヒンドゥー教のレリーフをもつ石柱など〔泉宗石 49-53, pls. 116-121〕、境内の泉州仏教博物館に展示されていた銘の入った宋元時代の鐘であった。また、同じく境内の泉州湾古船陳列館には宋船が展示されている。以前は、ここが海交館だったようだ。バスで文廟附近へ戻り、11:55頃、宋泉州市舶司址へ。廟とちょっとした展示室がある。

昼食後、タクシーをつかまえて、海交館へ。13:10着。中国社会科学院歴史研究所の陳高華研究員の紹介により、丁毓玲副館長に應對して頂いた。海交館參觀後及び明日の泉州における予定について意見を伺う。清源山は登山に時間を要するとのことで、体調を考慮して割愛することにする。また、当初は、〔泉州海外交通史博物館調査組 1959〕などに基づいて、いくつかの地点を訪れる予定だったが、現場にはたいしたものはないとの情報、及び時間の制約からこちらも割愛した。同館參觀後は、さしたる登山を要しない九日山を訪れることにする。翌日は、ほぼ計画通り、崇武古城・洛陽橋・伊斯蘭教聖墓を廻り、莆田へ向かうことにする。

続いて、同館職員の曾麗民女史の説明を受けながら、元代石刻(アラビア文字・シリア文字・ウイグル文字・パクパ文字・漢字)を中心とする展示物を見学する。体調不良と時間不足のため、きちんとメモをとることができなかったが、今後、総合的な整理・研究が必要であることを認識した。參觀後、同館の書店で関連の研究文献を購入。

雨がパラパラと降り始める。タクシー二台に分乗して、曾女史とともに、九日山へ。16:05頃着。宋元明代の「祈風石刻」を始めとする摩崖石刻を調査する。元のもの、至正9年(1349)「楔玉立題記」〔福宗泉 597〕〔黄柏齡 1983: 46-47〕、至正癸■年(1353?)刻に係る至正10年(1350)・至正11年(1351)「楔玉立詩刻」〔黄柏齡 1983: 30-31〕二段が確認できた<sup>(4)</sup>。宋代石刻の多さに注意を惹かれた。

バスで泉州市内へ。夕食後、外で元宵節の催しをやっていたため、見物に出かけるが、あまりの人の多さと、突然強く降り出した雨に辟易として、見物もそこそこに切り上げる。

<sup>(4)</sup> 後者は〔福宗泉 597〕に採録されていない。帰国後、海交館で購入した〔黄柏齡 1983: 20-21〕で確認したところ、紀年はないが元代に比定されるものも含めると合計六段が存在しているとのことである。

2月24日(木) 泉州－惠安－泉州－莆田 霧のち晴

朝目が覚めると、外は一面霧が立ちこめていた。朝食後、前日購入した書籍の郵送手続き、チェックアウトを済ませ、9:00にロビーで曾女史、上内・山口両氏と待ち合わせ。丁副館長に車を用意して頂いており、座席数の関係から、曾女史は同行されないとのこと。タクシーよりも格段に座り心地のよい車で、惠安県を目指す。霧は一向に晴れる気配もない。

10:00、崇武古城に到着。まず、風景区に入り、城壁の外側を散策する。しかしながら、立ちこめる霧のため、折角の絶景は全く堪能できない。巨大な戚継光の石像が濃霧の立ちこめる海を睨みつけている。南門から城壁内に入り、南門関帝廟を参観。城内には惠安東部独特の服装をまとった老年女性が多くみられる。つづいて、伝統的な民家が並ぶ城内を散策。鑑湖張氏宗祠・武功大夫府第・城隍廟などを参観する。城壁内の民家は伝統的なおもむきを残しつつも、修築・新築のものが多く、なかなか立派な家構えであった。再び城外に出て、天后宮を参観。さらに海岸へ出て、泉州古渡の牌坊を参観する。11:30過ぎ、崇武古城及びその一帯の調査を終了する。

12:15、洛陽橋へ(写真2)。泉州市・惠安県境界の洛陽江に架かる。惠安県側には、巨大な蔡襄の石像が立つ。橋を中州(島)まで渡ると、そこにはお堂と歴代の碑刻が並ぶ。最古のものは、嘉熙2年(1238)碑。また、末行に「…路市舶莆田縣開國男食邑三百戸借■■(此牛か)臣劉■■謹」の字句が確認される残碑がお堂の外壁にもたせかけてあった。

泉州市内へ戻り、13:10頃、伊斯蘭教聖墓へ(写真3)。1322年アラビク碑[泉伊石55, pl.205][泉宗石18, pl.256]、永樂15年(1417)「鄭和行香碑」[福宗泉72][泉伊石55, pl.206][泉宗石18-19, pl.57]を実見。そして、山腰には無数のムスリム墓が並んでいる。14:00過ぎ、航空ホテルに戻り、ホテル内のレストランで遅めの昼食。

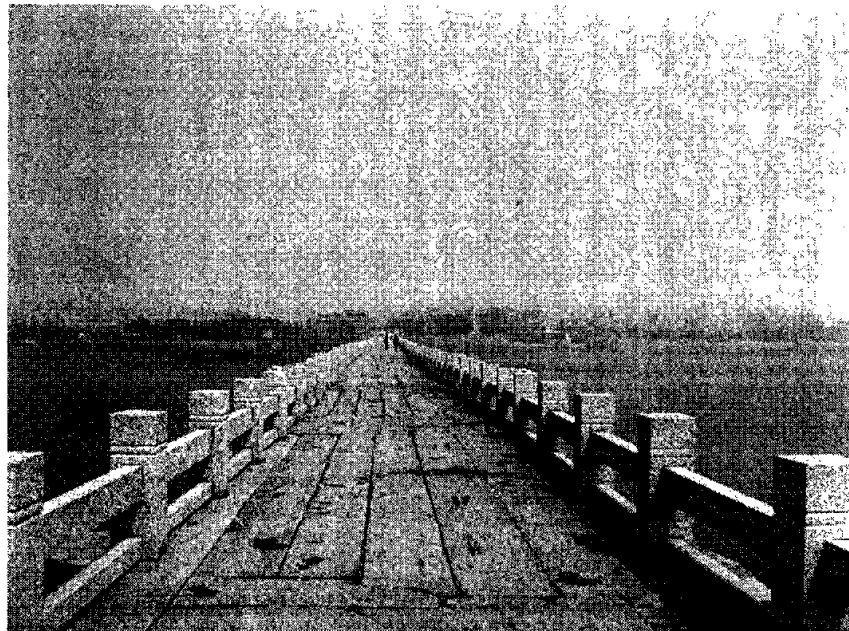


写真2 洛陽橋

泉州最後の訪問地は天后宮である。タクシーを探す、例によってなかなかつかまらない。そこで、折良く二台見つかったので、輪タクを選択。泉州の輪タクは、自転車に前後二つの座席がサイドカーのように設置されている珍しい形式である。運転手に腕力がないとバランスを失いかねない。15:30、天后宮前へ。門前の徳濟

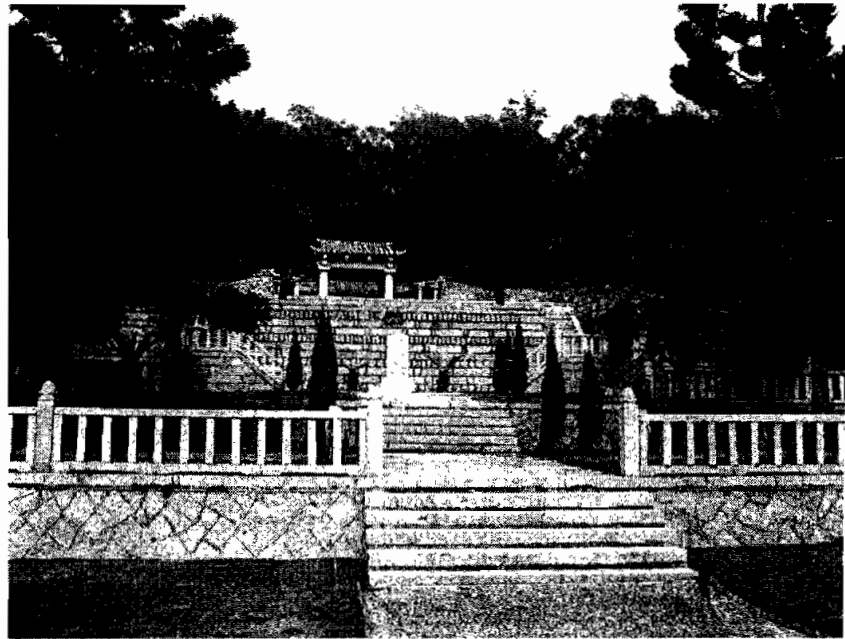


写真3 伊斯蘭教聖墓

門遺跡と天王宮を見聞してから、天后宮に入る。参観は無料である。境内の奥手は入場料制で泉州閩台関係史博物館となっている。

タクシーで再び航空酒店に戻り、預けていた荷物を受け取り、そのまま泉州バスターミナルへ。16:20着。17:30 発莆田行きのチケットを確保する。10分ほど遅れて出発。

惠安県城を過ぎた地点あたり、18:30頃から、激しい渋滞に巻き込まれる。事故のためか工事のためか、はっきりしないが、通行できないため、19:30頃とうとうUターンすることに。迂回の上、高速を使って莆田を目指すことにしよう。21:10頃、ようやく莆田市バスターミナルに到着。バスターミナル前の南方大酒店に投宿。



写真4 木蘭陂

2月25日(金) 莆田—廈門—龍岩 曇

朝食・チェックアウトを済ませ、8:30、まずは龍岩行きのチケットを確保すべく、バスターミナルへ。しかしながら、本日の龍岩行きのバスはすべて満席とのこと。廈門経由で移動することとし、12:50 発廈門行きのチケットを購入。後から考えると、廈門市内は高速から若干離れているので、あるいは、漳州経由がベストの選択であったかもしれない。本日の目的地は、木蘭陂・広化寺・元妙観三清殿である。タクシーをチャーターし、8:50 頃出発。最初の目的地は、最も郊外に位置する木蘭陂である。運転手は要領を得なかったが、地図を頼りに「木蘭」の牌坊を見つけ、そこをくぐって河岸に出る。9:10、果たして堰がみえる(写真4)。今もなおその役目を果たしている堰を検分しつつ、河を渡る。そこに「廻瀾橋」碑や文物保護単位の標石が立つ。その奥には木蘭陂紀念館がある。錢四娘などを祀った廟、及び明代以降の歴代碑刻が並ぶ碑廊があった。再び堰を渡ると、手前の河岸にも廟らしきものが確認されたので、行ってみたが、嶼上村老年人体育協会・嶼上村文化宮を兼ねた小さな仏堂で、めぼしい文物はなかった。

9:50、木蘭陂を後にし、10:00 頃、市区西南端に位置する南山広化寺へ。敷地も広くなかなか立派な寺であった。最も我々の注意を惹いたのは、五重の塔、広化寺石塔(写真5)である。塔には、宋代における寄進を示す文言が刻されていた。

その後、市内に戻り、11:00 頃、元妙観三清殿着。写真展覧会の準備中(撤収中?)のため、公開されていなかった。隣の三和堂文博芸術城前には元妙観関連と思われる碑刻が横たわっていたが、字句は確認できなかった。その風格から明清以降のものだと推測される。続いて、興化府城隍廟へ。向かいに大宗伯第の額をもつ旧家があったので、参観させてもらうが、食堂になっていた。城隍廟内には、二忠祠や陳文龍研究会・莆田市民族英雄陳文龍・陳広紀念館が併設されている。天啓年間の石柱も確認された。ここで莆田市の調査を終了し<sup>(5)</sup>、11:50、バスターミナルから徒歩数分ほどの食堂へ。ここでタクシー代を精算。



写真5 廣化寺石塔

<sup>(5)</sup> 莆田東部の涵江区にも寺廟は多い。今回は割愛したが、今後の調査を期したいと思う。

昼食後、徒歩でバスターミナルへ行き、廈門行きのバスに乗り込む。13:00 頃バスは出発し、15:20、廈門湖濱バスターミナルに到着。16:05 発龍岩行きのチケットを確保。18:50、龍岩バスターミナル到着。出口ではタクシー・三輪バイク、そして旅館の客引きが押し寄せてくる。三輪バイク二台に分乗し、陽光假日酒店に投宿。夕食は客家料理。

2月26日(土) 龍岩-永定-龍岩-漳州 曇のち雨

8:30、チェックアウト。8:50、バスターミナルからバスで永定に向かうべく、タクシーに乗ると、運転手がチャーターを勧めてくる。適正な価格であり、今後のスケジュールも考慮して、タクシーをチャーターすることにする。

10:45、永定客家土楼民俗文化村前に到着。天后宮・振成楼・慶成楼（永定客家土楼博物館）・奎聚楼・福裕楼・光裕楼、及び民俗村外の環興楼を参観。時間があれば、遠くまで足を運んで元代創建の裕昌楼や日応楼も調査したかったところだ。13:00 頃、民俗文化村を後にする。しばらくすると雨が降り始める。午前中天候がもったのは幸いであった。

14:50、龍岩のホテルで預けていた荷物を受け取る。天候その他を考慮して、運転手の申し出通り、漳州まで同じタクシーで行ってもらうことにする。途中雨は激しくなる一方で雷をとまなうまでに。17:30 頃、漳州賓館に到着。夕食はホテル内のレストランで。

2月27日(日) 漳州-廈門 曇のち雨

8:20、チェックアウトをすませる。朝食後、バスターミナルでバスの時刻を確認し、タクシーで南山寺へ。9:00、南山寺。めぼしい文物はみられなかったが、かなり立派な寺であった。ついでに隣の城隍廟も参観する。再びタクシーに乗って威鎮閣へ。9:40 着。かなり新しい建築物であった。裏手の媽祖廟も参観。そこから徒歩で文昌閣へ。10:10。期待はずれの楼閣であった。



写真6 漳州的街並み

さらに徒歩で、府衙址・市博物館のある中山公園へ。公園内には、七星池がある。

市博物館はあいにく休館日であった。前には比較的新しい碑刻が並んでいた。別の門から出ると、漳州府衙旧址・文物保護単位を示す標石が立つ。その先は古い街並みが色濃く残っていた（写真6）。市場も開かれている。古い街並みを歩き、11:20、文廟へ。ちょっとした展示室もあった。碑刻も並んでいたが、特記すべきものはなかった。

東西橋亭という小さい廟を参観した後、あんかけ焼きそばの昼食を。タクシーでホテルへ戻り、預けていた荷物を受け取る。バスターミナルに着く頃には、雨がポロポロと降り始める。山口氏は潮州行きの、残り三名は廈門行きのチケットを購入。13:00 発だったが、一本早いバスに乗り込むこととなり、慌ただしく乗車。雨は激しくなり、廈門の松柏バスターミナルに到着したときには土砂降りであった。タクシーに乗り込んで、初日と同じ牡丹万鵬賓館へ。チェックインを済ませ、陳高華氏から紹介されていた、廈門大学歴史系の莊景輝教授と携帯電話で連絡をとる。わざわざホテルまでおいでいただいた。翌日の廈門市博物館における元代地契の実見について相談する。その後、翌日の案内をしてくれることになった、院生林清哲氏を紹介していただき、また、上内氏の宿として廈門大学内の招待所を安排していただく。

莊教授、林氏と別れ、タクシーで華僑博物館へ。16:10、あいにく閉館した後であった。しかも翌日は休館日とのこと。廈門大学そばの新華書店と廈門大学内の華文書店を廻った後、初日とは別の海鮮レストランで夕食。

## 2月28日（月） 廈門—成田 曇

廈門大学招待所で、林氏と合流、公共バスで輪渡碼頭（渡し船乗り場）へ。9:10にはコロンス島（鼓浪嶼）に到着。租界の雰囂気色濃い街並みを歩き、廈門市博物館へ。陳文副館長に應對して頂く。元代地契はあいにく倉庫に保管されており、すぐには実見できないとのことであったが、後日写真を撮影して送って頂けることになった。その後、職員の説明を受けながら、同館の展示物を見学。なお、同館はコロンス島から市内へ移転する予定とのことであった。再び、廈門大学に戻り、残ったわずかな時間を利用して附近の書店で関連の研究文献を購入する。林氏、上内氏と別れた後、ホテルに預けていた荷物を受領し、廈門高崎国際空港に向かう。午後14:35 発のNH936 便にて成田空港へ。無事8日間の調査を終えることができた。

## おわりに

本調査においては、主に海交館所蔵の各種文字言語石刻、ならびに〔福宗泉〕・〔福宗興〕所収元代石刻の現存状況の確認を行った。前者に関しては、〔泉伊石〕・〔泉宗石〕の整理・研究があるが、その後も新たに発現したものが相当数あり、職員によれば、一部はまだ未研究とのことである。同館は、近々「泉州伊斯蘭文化陳列館」を新たに開館するとのこと、これに連動して整理・研究・公開が進展することを切に願う<sup>(6)</sup>。

漢語石刻については、〔福宗泉〕・〔福宗興〕の有用性が確認された。今後他の地域の分冊の刊行が待たれる。一方で、これまで筆者らの調査報告〔飯山・井黒・船田2002〕・〔井黒・船田・飯山2005〕で指摘してきたように、若干の疎漏は避けられない。多くの研究者が複数次に亘る調査を遂行することによって、情報をより精確にしていくこ

<sup>(6)</sup> 2005年9月には〔泉宗石〕の増訂本が刊行される予定である。



とが求められよう。

今回は時間の都合上参観できなかったが、廈門大学民族博物館にもアラビクの墓誌が所蔵されているという。また、スケジュールの都合上、あるいは体調悪化のために、[福宗泉]・[福宗興]で元代石刻の現存が確認されるいくつかの地点の訪問はあきらめざるを得なかった。再度の調査ならびにそれに基づく情報の提供、研究を期して擱筆したい。

【謝辞】泉州海外交通史博物館の丁毓玲副館長、職員の曾麗民氏、廈門大学の莊景輝教授、院生の林清哲氏、廈門市博物館の陳文副館長には快く応対していただき、様々な便宜をはかっていただいた。陳高華氏、飯山知保氏には、仲介の労をとっていただいた。また、向正樹氏からは、事前に泉州・廈門の情報を提供していただいた。これら諸氏、ならびに本調査に同行していただいた、上内健司・深澤貴行・山口智哉の三氏に感謝の意を表したい。

#### 参考文献

- [福宗泉]：鄭振滿・丁荷生（編）2003『福建宗教碑銘彙編 泉州府分冊』全3冊、福建人民出版社
- [福宗興]：鄭振滿・丁荷生（編）1995『福建宗教碑銘彙編・興化府分冊』福建人民出版社
- 黄柏齡 1983『九日山志』（庄炳章主編『泉州文物志』（一））晋江地区文化局文管会
- 井黒忍・飯山知保・舩田善之 2005「山西・河南訪碑行報告」『大谷大学史学論究』11：117-156
- 飯山知保・井黒忍・舩田善之 2002「陝西・山西訪碑行報告（附：陝西・山西訪碑行現存確認金元碑目録）」『史滴』24：151-184
- 森田憲司 2005「近着石刻関係書所収元代石刻リスト2」『13, 14世紀東アジア史料通信』3：11-13
- 向正樹 2002「モンゴル時代泉州の清浄寺修築について」『関西アラブ・イスラム研究』2：89-105
- [泉伊石]：福建省泉州海外交通史博物館 1984『泉州伊斯蘭教石刻』寧夏人民出版社・福建人民出版社
- 泉州海外交通史博物館調査組 1959「泉州塗関外法石沿海有関中外交通史跡調査」（『考古』1959-11：611-618+1p1.
- [泉宗石]：呉文良 1957『泉州宗教石刻』科学出版社
- 杉山正明 1989「元朝治下のムスリム」川床睦夫（編）『シンポジウム「イスラームとモンゴル」』（中近東文化センター研究会報告 No. 10）東京：（財）中近東文化センター：83-92, 245-259

（ふなだ よしゆき 九州大学）